

70年間増改築を繰り返してきた住宅の新しい増改築の案提

0_背景・目的_住宅の中に潜む都市性の再解釈

—背景 70年間増改築され続けた住宅—

築70年の木造住宅がある。この住宅は70年間のうちに少なくとも3回は増改築されている。私は、たまたまこの住宅の天井や床を解体し、調査するプロジェクトに携わった。外観は配管が剥出しで、全体の統制が取れていない。剥がした天井から見た構造は華奢であるが、通常の木造とは異なる構成でごちゃごちゃしている。

このような歪な現状に私は、都市の「雑多」さと何か似ているようなものを感じた。



既存築70年の住宅 北西ファサード
増改築や配管の増設によって外観に付属するものが増え、都市を縮刷したかのような雑多さを感じた。



敷地半部分から建物を見る
建物は敷地外からほとんど見ることができない。この建物の構えの意識があるのは北西部分のみである。



無理やりな増改築によってできた構造
有り合わせの材料で乗っけるだけのようにつまみ増改築したことで通常では見ることができないような構造となっている。

—目的 雑多なキャンパス—

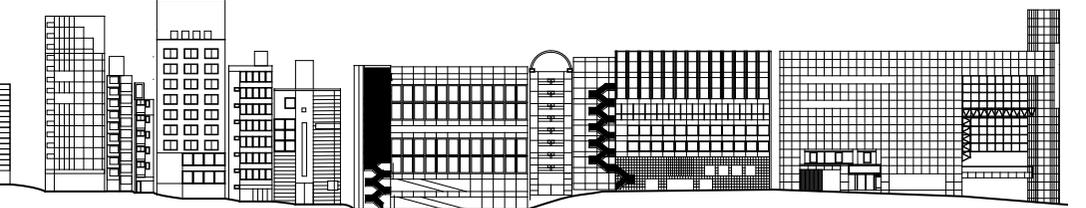
新宿や渋谷といったまちは、様々な建築のファサードに看板、剥き出しの設備、建物の管理者たちは好き勝手をしてきた。当然デザインコードは無く、「雑多」という言葉そのものとなっている。この状態を図面に起こすとは線が溢れかえる。その線に法則性や規則性を見出すことはできず、一つの建物で完結したデザインとなっている。また、線の複雑さは都市の輪郭を失い、形を捉え辛くしている。さらに、何か新しく設置されても、人が100人増えようとも大きく変化を感じない。都市は手を加えても進化しなくなったとも考えられる。

一方で、現在の都市での活動を思うと、一つの建築に対してたくさんの人が使い、空間の多様性が求められている。例えば住宅でも、一部賃貸として貸出し、家族以外の人間が家を使うことはザラにある。つまり、不特定多数の人間を受け入れるような柔軟なコンセプトが求められている。また、住宅だけでなく仕事場もシェアオフィスやワーキングスペースといった不特定多数で使う場が増えた。この時代に即した建築は「多くのひとものを受け入れる空間」を有していることだとと言える。

ここで私は、一つの建築の中が「雑多」で複雑な線が溢れかえれば、新しく人が増えても、ものが増えても、あたかもそこに元々あるような空間をつくり出すことができるのではないかと考えた。つまり、線が錯綜する空間は、木を森に隠すような場となり、「多くのひとものを受け入れる空間」と言えるのではないかと考えた。

雑多な線が錯綜したキャンパスに、新しい線を描き足してもわからない。つまり、現在の都市は「雑多なキャンパス」と言えるのではないかと考えた。

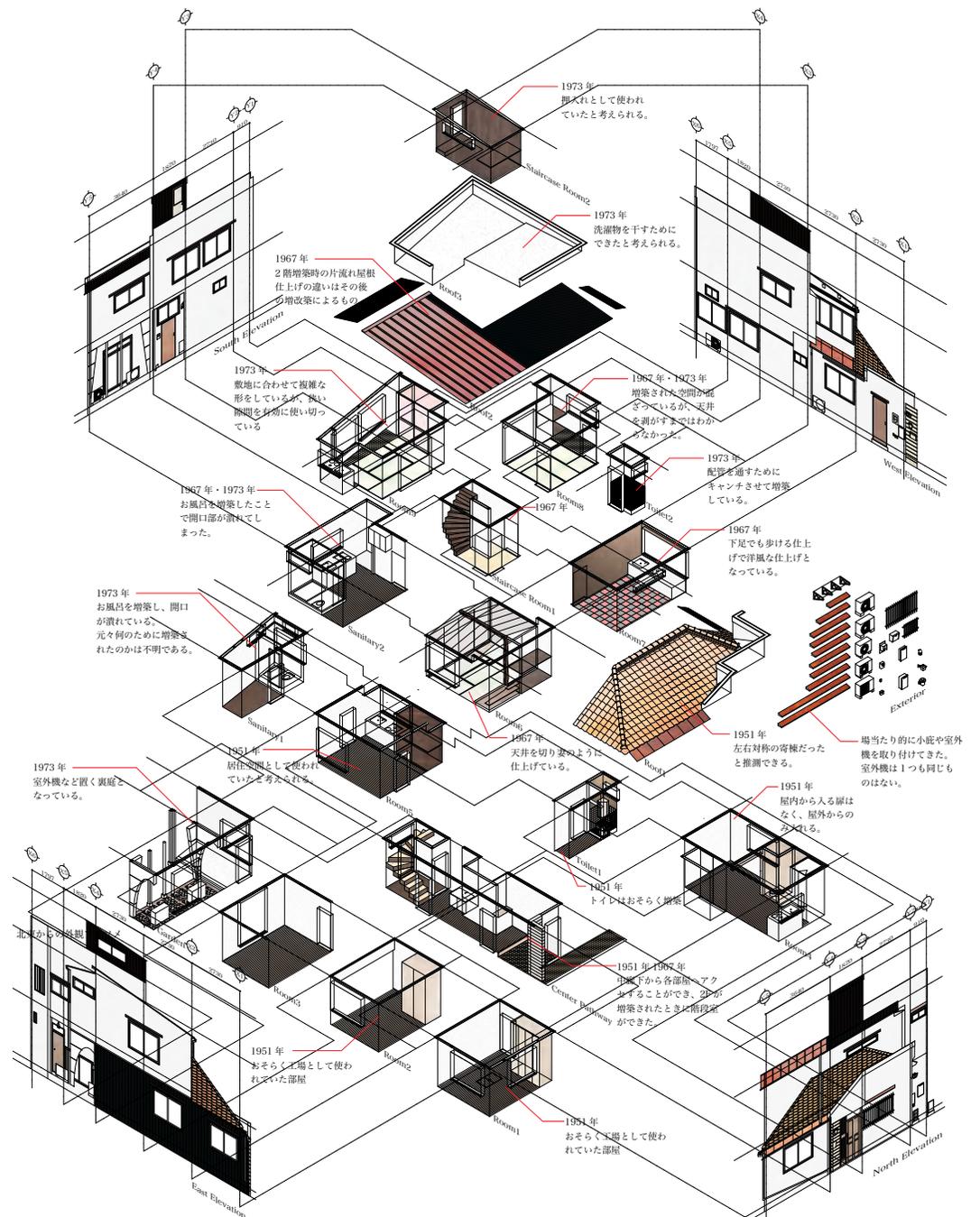
ある意味「建築家なしの建築」と言える本住宅。時代に対応するために場当たりの変化を繰り返すことで堆積した線は、これから別の用途で使われていくための「雑多なキャンパス」となった。私は本提案の中でこの雑多さをコンテクストととらえ、多くのひとものを受け入れることができる空間を設計することを目的としている。



渋谷道玄坂
デザインコードのない建物が乱立しているため、新しい看板やオブジェを設置しても都市全体として変化を感じられない。それどころか、新築が建つともしほらくすればこの雑多の中に溶け込んでしまう。変化を感じることができなくなったと言える。

1_調査_内外の雑多さ

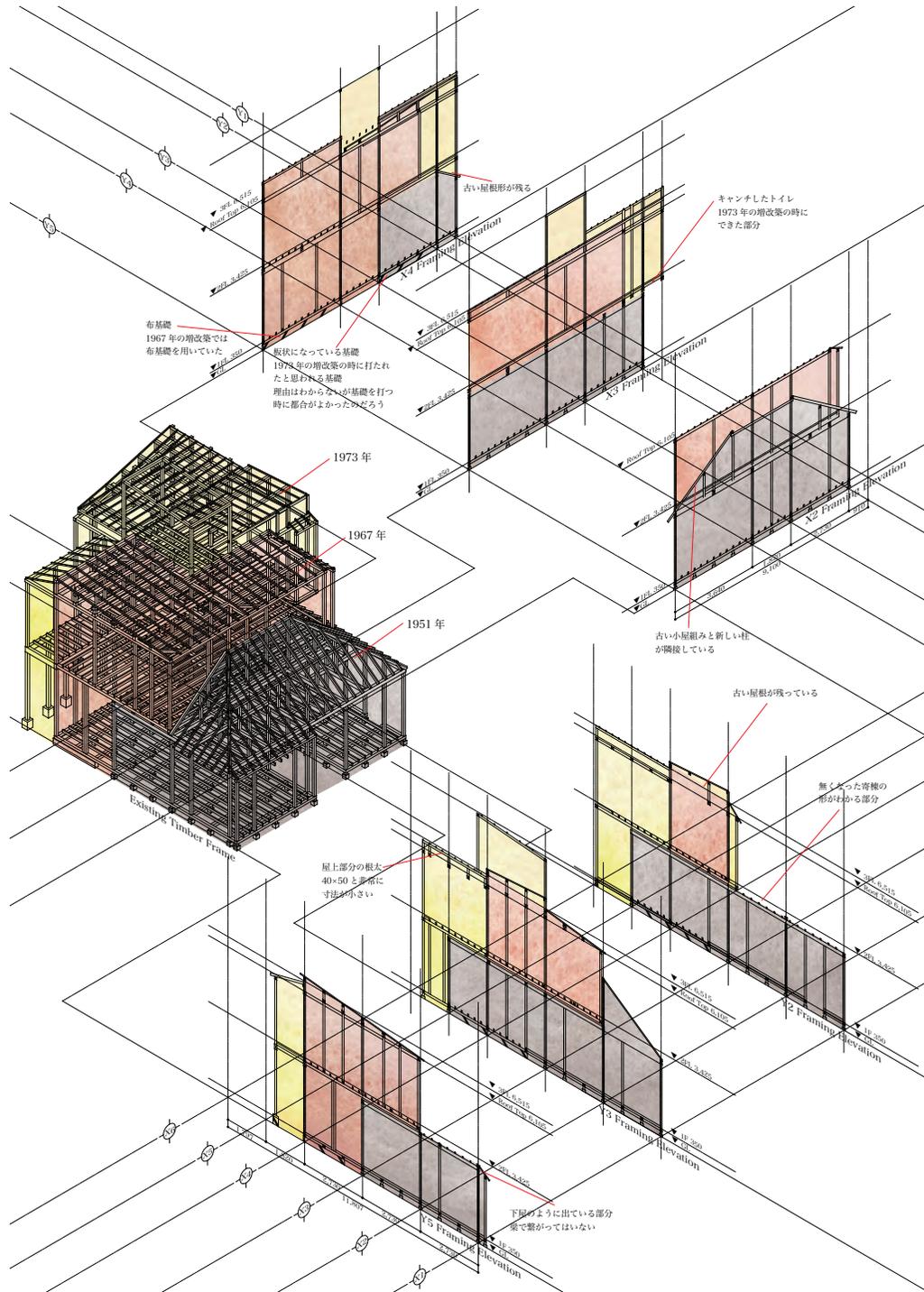
内部は増改築の度に仕上げが変化している。そのため、各部屋はカラフルでたくさんの領域ができているようであった。しかし、壁で隔たれているため、それらにつながりはなく延床面積に比べて狭く感じた。



内部は増改築の度に仕上げが変化している。そのため、各部屋はカラフルでたくさんの領域ができているようであった。しかし、壁で隔たれているため、それらにつながりはなく延床面積に比べて狭く感じた。

1_調査_構造の雑多さ

天井を解体したことによって、構造の歴史が空間を陥入するかのような構成であることがわかった。しかし、天井で隠れていたためこのことを感じることはできない。また、現代木造と比較すると華奢な材を使っているが、重層するように梁が置かれることで二重梁の役割を果たし、70年持つことができたと考えられる。華奢で不恰好ながら、この梁の見た目は特別な力を有していると感じた。



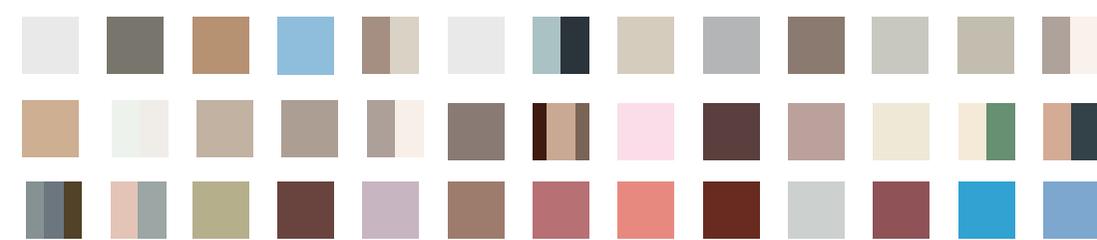
1_調査_雑多さのまとめ

内部の調査からたくさん仕上げの採択することができた。様々な材や目地、色が混在する空間はまさに雑多ということができ、このコンテキストをどのように活用していくかを考える。

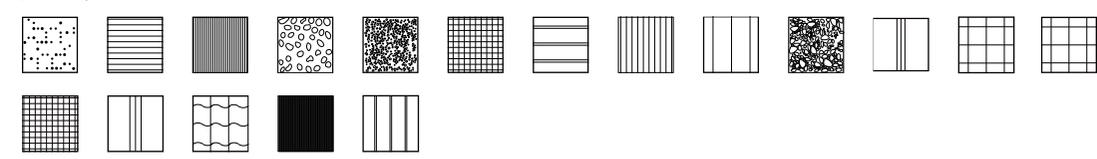
仕上げの写真



おおよその色



メジのパターン



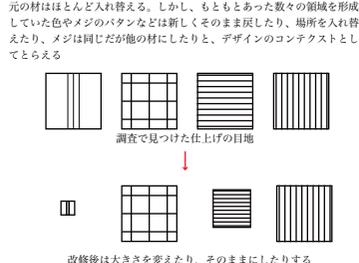
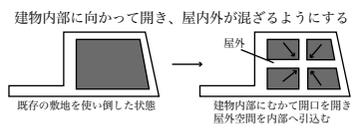
問題点

- ・周辺建物との距離感が近い
- ・屋外を感じられる空間が少ない
- ・すでに敷地を使い倒している
- ・内部空間が閉鎖的である

- ・1Fの床下の構造部材が土と近い状態で長年使われていたため腐っている
- ・コンクリートベタ基礎を打ち直す必要がある
- ・1Fの床下の構造部材の影響で1Fの床材は交換する必要がある
- ・2F根太に付く板材は厚みが10mmの板材を用い、構造的に弱く交換する必要がある
- ・上記より2Fの床材は交換する必要がある
- ・屋根材も劣化がひどく、一部捲れ上がっている部分もあり、強風で飛ばされる危険性や雨漏りの恐れがある
- ・外壁がひび割れ一部構造が剥き出しとなっている
- ・外壁、内壁とともに構造用合板やプレースは無くほとんどを交換しなくてはならない

- ・屋根勾配のゆるさ
- ・独特な群像系

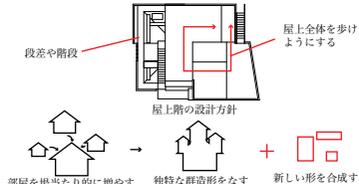
設計方針



用途

既存の詳細と用途
 所在：東京都世田谷池尻
 主要用途：住宅 縫製工場
 部屋の数や状況からおそらく5人〜9人ぐらいが住込みで活動していたと思われる
 主要構造：木造2階建
 増改築年：1951年 平家
 1967年 一部1階 2階
 1973年 一部1階 一部2階 屋上
 それ以降 内部にシャワーブースやユニットバスを増築
 最高高さ：8.837m
 主要仕上：外部 モルタル 内部 各部屋によって大きく違う
 敷地面積：122.87㎡
 建築面積：83.20㎡
 延べ床面積：155.59㎡

改修後
 1F オフィス1 複数の会社が入る空間で、この建物を管理する事務所も入る
 オフィス2 土間空間 工房などとして使うことも可能
 キッチン・ダイニング 利用者用
 トイレ2台
 シャワー
 洗濯・乾燥機
 2F コワーキングスペース フリーアドレス
 3F 利用者様の庭





オフィス1 北面から観る

東面から見た時に比べ線は少ない。そのためすっきりとした印象を受ける。また、奥の板張りの仕上げは図面ほどメリを感じないため、プレースがかなり印象的である。図らずも奥には裏庭があり、静かな印象の空間であるためプレースで区切られていることが効果的であるように感じる。



コワーキングスペース 東面から観る

材との重なりによって線がたくさん生まれて、境界が現えづらくなっている一方で色が違うため領域はキッパリと別れている。色の違う空間を往來するような仕器の設計などを行うことでもっと混ざり合う空間を作ることができると感じる。



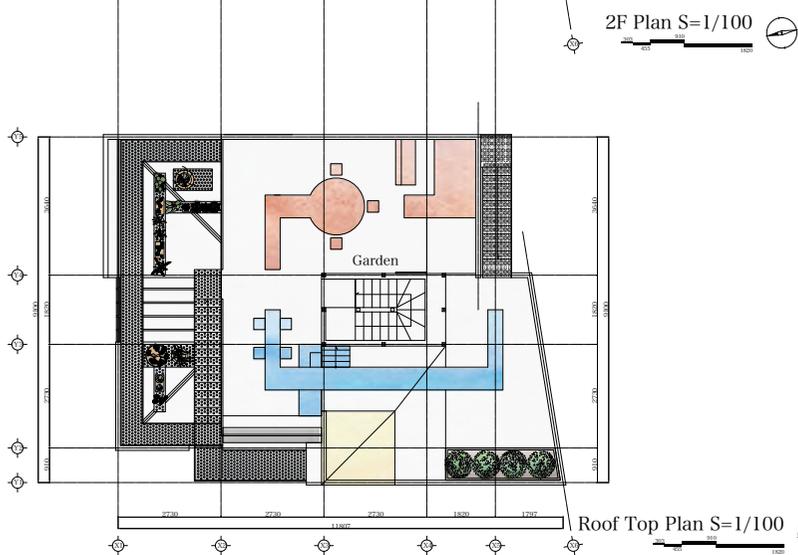
オフィス1 東面から観る

オフィス2のプレースとの黄砂が印象的である。奥の活動ははっきりとはわからないが、気配を感じる事ができる場となっている印象を受ける。また、線と線で作られている中廊下はもともとが隠れてもプレースでカモフラージュされそうである。



コワーキングスペース 南面から観る

屋外から、観るとパースの時間様に線の複雑さから、空間がどのようなようになっているかわかりづらくなる。きっと人が本当に使うと気配を感じる空間となると思う。一方で線によって重木はかなり見えなくなる。空間の線の支配がこちら側からと減る印象である。



コワーキングスペース 南面から観る2



コワーキングスペース 西面から観る



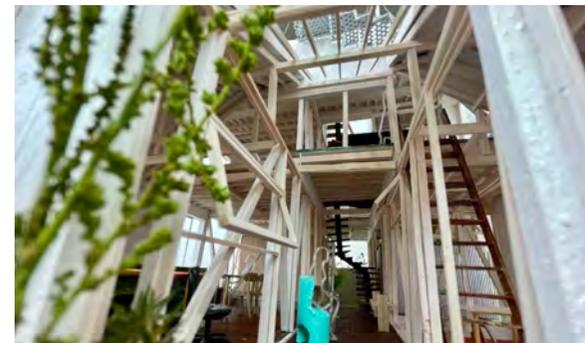
オフィス2 西面から観る



オフィス1 北面から観る



中廊下 南側から見る



中廊下 北側から見る